

『ころ』の自己本位

Junko Higasa 2014.11.8

漱石は書いた。乃木さんにとって『生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、^{どっち}何方が苦しいだろうと考えました』と。すなわち、周囲の人々の意思や状況によって、自分の意思に反して生きた三十五年と、自分の意思に従った一刹那とどちらが苦しかったのだろうか、と。乃木さんの三十五年は、生きていながら死んでいた歲月。一刹那は死んだけれども生きた瞬間ではなかったろうか。

漱石は子供の頃、養家の親の都合で人生を決められそうになったり、生活していくために好きではない教師生活を送ったり、国の命で仕方なくロンドンに赴いて極度の神経衰弱に陥ったりした。その与えられた状況の中で自分の生き方を探りながら死んでいたような年月と、苦しむことも覚悟の上で自分の意思で生きている作家としての年月と、どちらが苦しいだろう、と考える。それは確たる意思に目覚めた個々人の苦悩であり、ある程度は調整可能である。しかし乃木さんの場合は、陸軍の役目、華族存続の役目という、言うなれば国の制度を背負っていた。そこに国か個人かという問いが生まれ、動かしがたい事実が存在する。それが時代の苦悩である。

人間として生まれた以上、己の人生を確立したい。そう望んでいた漱石は、国のために個人を捧げた乃木さんの「生」はどこにあったかと考えるのである。